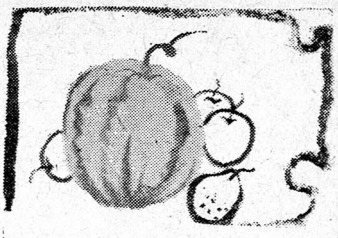

夏から秋への菜園の手入の二、三について

中原忠夫

葱の土寄

一年葱の栽培の場合大体定植後一カ月位で第一回の土寄を行い、その際溝に根元よりやや離して追肥を行う。一年葱は秋おそくまで生育を続けるもので、十月一杯は生長するから九月下旬までは一、二度位尿素か、腐熟人糞尿をうすめて施して肥培を図つた方が良い。

さて土寄だが、収量の点から見ると何回にも分けて行うより回数を減らして行つた方が収量の多いことが確められている。これは土寄によつて葱の生育が弱められるためで、回数が多い程太りが悪く目方が上がらないからである。ところで札幌葱など普通に作られている越冬性の品種と異なり一年葱は、生育旺盛で殆ど分蘖しないから極めて肥大し易く、一、二回程度の土寄では葉鞘の緑を除いた程度で軟白の意味がなく、極めて太い堅い質のものしかとれない。丁度府県から入る葱のようにあまり質が上等とはいえない。勿論定植の際の株間にもよるが精一杯丁寧に植付したとして一寸位の株間しかとれないと思われる。従つて土寄は回数が少い方が良いからといつて極端に回数を減らすよりは、三四回位行つた方が質の良い品がとれる。

土寄の方法は、第一回目は定植後一カ月位即ち溝を五寸位掘つて植付けるものとして葉身の分岐点が植溝の上に出る頃を見計らつて、溝が平らになる位行う。その後は二十日置位に二～三回土寄する。その場合葉身の分岐点に土がかからない程度を限度として行うことが大切である。最後の土寄は収穫前一カ月位前、即ち九月下旬までに行うべきである。それは土寄して葉鞘部の緑がなくなり軟白されるまで大体時期から見て三十日位かかるためである。軟白される日数は品種や温度により異なるといわれている。

最後の土寄は軟白が目的であるから分岐点の上一～二寸位土を覆うようにする。いずれの場合でも土寄せする土は土塊を砕いて丁寧に行うべきである。

二年葱の場合は生育が大体降霜まで、それも十月に入つて気温が低下すると生育が緩慢になるので九月二十日頃までに最後の土寄をすませるようにすることが大切である。

葱の収穫、貯蔵

二年葱の収穫は九月末から始められるが、多くは翌春までそのままにしておき、抽薹の始まる前に掘取った方が収量は多いようである。

一年葱の場合は冬季そのまま圃場におくと翌春は殆ど腐敗して新芽が出ないものであるから、十月下旬から十一月始めに掘取ってしまう。冬季間に利用したい場合は圃場の片偶に仮りいけしておき必要の都度雪を割つて出すようにする。ただこの場合三月以降になるとむつかしい。むしろ自家用の場合は乾燥葱にしておくのも一方法である。乾燥葱にする方法は掘取つた後、晴天の日を見計らつて数日屋外に拡げて天日乾燥して、外皮が良く干したら、湿気の少ない納屋の棚にあげて置くと葉身の部分は減るが、外皮さえ除くと何等変りなく利用出来る。例え寒さがきびしく内部まで凍結したとしても、圃場に寄せいけしたものより翌春の利用程度は高く、多く萌芽するものである。

牛蒡の秋蒔栽培

牛蒡の秋蒔栽培は翌春六月下旬から七月にかけて掘取れるので、丁度前年度ものと新ものとの端境に当るので市場向としても有利であつて都市近郊ではかなり試みられるようになつて来た。家庭用としてもその頃野菜が片寄つたものになるので試みるのも面白いと思う。

春蒔した牛蒡は全部翌春薹立ちする。播種期をずらすに従つて薹立ちが少くなり、八月下旬以降の播種では例え順調に生育しても薹立ちは見られなくなる。播種があまりおくれると年内の生育が進まず越冬が困難になるものである積雪地帯では比較的容易に越冬するが、根雪のおくれた年とか土が軽く、積雪前、融雪直後霜柱のひどい場所では小苗では根が浮上げられて枯死するものが出たり、頸部に凍害を被り易いから多少抽薹を見てもやや早蒔して置く方が無難のようである。大体越冬前に本葉三～四枚位に生育していると割合それらの被害を軽減出来る。播種のおくれた場合、霜柱の害のひどいところはむしろ播種をおくらせて、年内に発芽しない程度、十一月初旬に蒔付けて置くことによつても翌春の生育は可成り促進される。

牛蒡栽培の適地は土層の深い砂質壌土であつて、火山灰系の土質では肌色の悪い品が出来るのは論をまたないが、いずれの場合でも二～三年以上の連作をさけるようにし、特にネマトーダの被害をうける畑は極力避けることが大切である。堆肥は特に火山灰系の土質では生育が劣るので施用した方が良い。ただ、堆肥を施すにしても腐熟の度合によるが岐根を防ぐためになるべく前作に施すようにすると良い。燐酸は元肥として施し、窒素加里は翌春融雪早々に追肥するのを立前として播種時期には三分の一程度に止めておくようにする。

秋播牛蒡は春播牛蒡に較べて鬆が入り易く、また質が硬くなり易いので肥培には特に注意して早掘りした方が良い。また株間を狭くして細めのものを取ることも大切である。従つて播種の場合五割位種を多めに

蒔き、欠株を少くすることと、間引は翌春に主眼を置くとしても越冬前の生育を揃えるなどの点に注意する必要がある。

品種としては筆者は比較して見たことはないが長野などの例では渡辺早生牛蒡のような根身の短い肉質の軟いものが良いとしている。

苺の定植

一　古株の更新について

フェアファックスは二〜三年株になると収穫始め頃から心葉が縮れるものが現われ収穫終りの七月半ばになると、圃場の殆どに見られるようになる場合がある。このような畑ではランナーの発生も悪く、次の年は実の肥大が悪く、種子が突出して色沢も悪く収量は激減する。この原因についてはいろいろの説があるが、最近北大沢田先生の御話では赤ダニの寄生によるものであろうといわれ、その対策としてマラソンなどの有機燐剤の撒布が極めて有効であるといわれている。被害の多いのはフェアファックスでドルセット、東北一号がこれにつぎ、東北二号や四季成、モナークは比較的被害が少ない。株作り、芝作りのいずれの場合にも被害の程度には差がないようなので更新を早めに行わないと経営上思わしくない結果になる。

苺苗を新植するにしても更新するにしても、従来のように定植次年度は収穫を期待しないで株の発育を計ることに重点を置いた方法から、第一年目にも可成り収量を挙げ得るような植付法を考えて行くことが大切であろうと思う。

二　定植の時期

植付次年度よりある程度の収量を得るためにはなるべく早く植付けすることが大切である。しかし苺の収穫終りが七月十五日から二十日頃になるので、除草の手間とか八月始めの降雨の如何によつてランナーの生育に影響されることが多く、普通植付可能なランナーが出来るようになるのは九月上、中旬以降となる。早めにランナーを得るためには五月末から出始めるランナーを収穂の際傷めぬようにして絶えず除草を行つて、除草のためにランナーが転がるのを防ぎ収穂を早めに打切ることが必要である。特に二年株のランナーの発生は旺盛である。

三　定植の方法

植付けに当つては苗をなるべく丁寧に掘取り、出来れば根に土をつけたまま植込むようにすると、植傷みも少なく、翌春の花房の数もふえるものである。九月中旬普通に苗取りして植付けた場合、翌春の花房はフェアファックスで株当り平均一、三本位であるが、丁寧に植付けると二〜三本のものが三〜五割は見られる。結局植付の良否によつて第一年度の収量に及ぼす影響が大きいものである。藤の沢のある農家は第一年目の収量を多くするため、畦間の間に更に一列植付けることによつて好成績を挙げている例がある。この畦は収穫後の除草の際に除去してその後は普通の間隔とするのである。丁寧に植付ける手間がない場合や植付のおくれた場合などにはこの方法を採り入れることが良いと思う。

畦幅、株間は管理収穫の点から、かりに更新を早めにするとしても畦幅三尺、株間八寸〜一尺位は必要であろう。

四　施　肥

堆肥や油粕等の有機質肥料は不可欠で、特に乾燥し易い瘠薄地に赤ダニの被害が著しい傾向があるので尚更である。

植付の際は有機質肥料のほかに過燐酸石灰などの燐酸の全量と窒素、加里の半量をやや深めに施すようにする。二年株以降になると北海道は概して春の五月に降雨少なく乾燥するので春の施肥は、十分吸収されないうちに開花が始まる状態が多いので、施肥全量の三分の二位は秋に施した方が良いと考えられる。施肥量はその土地土地で一概にいわれないが、成分量で窒素三〜四貫、燐酸三貫、加里二〜三貫位が慣行例から算出した適量である。

促成栽培（トンネル栽培）の苗の準備

昭和三十年の五月号に東北農試の佐々木技官が詳しく紹介されているので、ここでは農場で試験した結果特に気の付いた点を述べることにする。

トンネル栽培に利用する苺の株は一年株が良いか二年株が良いかという問題であるが、ビニールは三尺一寸幅と四尺五寸幅の二種が利用し易く、単位当株数の多いほどビニールの利用効率も高くなるものである。

古株の株当り花房数は多いが、葉数もそれだけ多いので兎角徒長し易く、ビニールの開閉（換気を図ること）を綿密に行わないと成熟期になつて急に株が弱ることが多い。それだけ多くの手数を要するが成熟期は一年株に比べ四日から七日おくれるのが普通である。更にトンネル栽培で注意しなければならないのは防風の点で、圃場の古株を利用してビニールを被覆しようとしても、防風の考慮なくしては、ビニールの破損のみでなく、促成の効果もあがらない。少くともビニールは三年使用で償却するようにしないとうまみはない。

以上のような点から見ても一年株の有利なことがわかる。一年株の花房数は品種によつてかなり異なつて多いのは四〜五本も出るものがあるが、最近の市場の人気、嗜好から、ドルセット、フェアファックスをとりあげた方が良いと思う。これらの品種も丁寧に植付け肥培に努めると花房数がかなりふえることは前にも述べた通りである。

場所としては風当りの少ない（囲いなどによる風除け設備は資材さえあれば行つた方が良い）融雪期に水はけの早い所を選ぶべきで、春は雪を割つてでも早めに被覆すればそれだけ生育も進み、農場で行つた今年の成績では、四月十日頃からかけ始めると六月始めには収穫出来、二十日過ぎに融雪後にかけたものでは六月十二日頃から収穫出来るようになつた。

植付間隔は四尺五寸のビニールを利用するとして七寸角の三条値が適当なようである両側は幾分広めに開けないと、苗が徒長し易く、ビニールの開閉で茎葉が傷み易い。

（雪印種苗・藤之沢育種場主任）